

## 令和3年度第1回アーバンデザインセミナー実績報告書

### 1. 開催日時

令和3年5月26日（水） 18時30分～20時00分

参加人数: UDCBK での視聴: 5名、オンライン: 27名=計32名

※オンライン会議システムとUDCBKのオープンスペースでの視聴を併用

### 2. テーマ

「草津の未来につなぐSDGs」

- 草津市では、令和3(2021)年度から令和14(2032)年度までのまちづくりの指針となる、「第6次草津市総合計画」を策定したが、その将来ビジョンの実現には「協働」と「SDGs(持続可能な開発目標)」の視点を踏まえることが重要となっている。そこで今回のセミナーでは、SDGsの観点から、滋賀県立大学でSDGsの地域化拠点を目指して活動されている谷口嘉之氏をお迎えし、産学公民連携によるまちづくりの展開に向けた実践について学んでいく。また、草津市企画調整課より、総合計画の概要についても説明する。

### 3. 話題提供者

- 谷口 嘉之 氏  
滋賀県立大学 地域共生センター 地域連携コーディネーター
- 草津市総合政策部企画調整課



#### 4. 話題の概要

##### (1) 草津市企画調整課による説明

- 総合計画は、平成 24 年 4 月に施行した草津市自治体基本条例の第 13 条に策定根拠などが示されている。
- 総合計画のポイントは 3 つある。1 点目は、市政運営の最上位の計画である、ということ。2 点目は、市民の参加を踏まえて策定するという事で、市民意識調査やアンケート、審議会、市民会議での意見、さらにはパブリックコメントでの市民の意見を反映して策定したものである、ということ。3 点目は、総合的かつ計画的な市政運営の指標となるものである、ということである。
- 総合計画は基本構想と基本計画から成る 2 層構造となっている。基本構想は、草津市の目指すべき将来ビジョンを示し、その実現に向けたまちづくりの基本目標を明らかにするものである。また、基本構想の期間は令和 3 年度から令和 14 年度までの 12 年間としている。
- 基本計画は、まちづくりの基本目標に基づき、各分野の基本方針、主要な施策、達成すべき目標や指標などを明らかにするものであり、期間は、一期 4 年の 3 期計画としている。
- 草津市の人口は、近年においても人口増加傾向が続いており、平成 27 年の国勢調査では 13 万 7,247 人となっていたが、今後の推計では、令和 12 年、2030 年には 14 万 7,400 人程度になる見通しで、ここがピークとなり、その後は減少に転じ、令和 22 年、2040 年には 14 万 3,200 人程度になると推計している。草津市でもいよいよ人口減少社会が始まることになり、総合計画においても、このことへの対応が必要となる。
- 社会情勢の変化も総合計画を策定する上での重要な要素であり、市内の一部の地域では人口減少が始まり、高齢化率が 30%を超えるなど、高齢化の進行も大きな課題となっている。生産年齢人口比率の低下や高齢化率の上昇が加速することなどにより、経済規模の縮小や税収の減少、医療や介護、年金などを初めとする社会保障費の増大などに対応していかなければならず、社会資本の老朽化に対しても、限られた予算内で対応していかなければならない。
- また、コミュニティの希薄化、地域住民のつながりの希薄化が進む一方で、様々な多様化・複雑化する市民のニーズや地域の課題などに対応できる仕組みづくりを進める必要がある。さらに、大規模災害や、近年のゲリラ豪雨などの異常気象、また新型コロナウイルス感染症の世界的大流行といったこれまで経験したことのない事態に対して、市民の生命と財産を守る力強い施策を実行する必要がある。新たな総合計画においては、これら社会情勢の変化に伴う諸課題に適切に対応していく必要があると考えている。
- アンケート調査において見てみると、市民意識調査では、将来の望ましい都市像につ

いて、健康、安全安心、子育てが上位に選ばれた。また、高校生への調査では、人にやさしい、趣味や娯楽、スポーツ活動、教育が上位に選ばれた。転入者への調査では、草津市への転入の決め手は、通勤・通学時間が最も多く、次いで住宅価格、家賃、広さ、買い物等生活の利便性の順となっており、草津市の利便性や住みよさが評価されている。また、市に期待することとして、住み心地のよい住環境や医療・福祉サービスの充実などの意見が寄せられた。今後は、快適で住み心地の良い生活環境を維持向上させ、草津市に長く住んでもらうことにより、誇りや愛着を持ってもらえるよう取り組んでいく必要があると考えている。

- 市民会議では、人やまちに優しくつながりがあるまちが重要であるとの意見が多く寄せられた。地域別懇談会では、今後進めたいこととして、公共交通バスなどの充実、渋滞対策、地域コミュニティの活性化、まちづくり協議会の進展など、市民が身近に感じている問題についての意見が多かった。草津市の30歳から45歳までの中堅職員から提案された将来ビジョンのキーワードでは、人と人のつながりを重視した提案が多くあった。
- 新たな総合計画での方向性としては、今後の人口の見通しや考慮すべき社会情勢の変化、まちづくりの取組、市民の思いなどを踏まえ、次の4つの視点で整理を行った。視点1の「本市の持つ強みに一層の磨きをかけていく」については、住みよさを今後も維持向上させていく。視点2の「人と人とのつながりや思いやりの醸成」では、人の繋がりを大切にし、きずなを深め、地域共生のまちづくりを目指す。視点3の「ネットワークが充実したさらに暮らしやすいまちづくり」では、まちなかのにぎわい創出、地域特性を生かした地域再生の推進、まちなかと郊外を結ぶ公共交通ネットワークの充実などを目指していく。視点4の「“誇りや愛着”の醸成」では、まちのよさを過去から未来へ親から子へ、子から孫へと受け継ぎ、誰からも愛されるまちを目指す。
- 草津市として目指す将来ビジョンとして、「ひと・まち・ときをつなぐ 絆をつむぐ ふるさと 健幸創造都市 草津」を掲げた。ビジョンは、人と人との繋がり、人から地域まちへと広がりつながりから生まれる絆をつむぐことで、草津への愛着と誇りが生まれ、時を重ねても誰からも愛されるふるさとになる姿や、誰もが生きがいを持ち、健やかで幸せになれるまちを市民とともに創造していく姿をあらわしている。
- 将来ビジョンを実現するために、分野ごとの取組の方向性を示したものがまちづくりの5つの基本目標である。一つ目の「『こころ』育むまち」では、豊かなこころを育むまちを実現するために、人権、男女共同参画、学校教育、生涯学習・スポーツ、歴史・文化の分野を位置付けている。二つ目の「『笑顔』輝くまち」では、誰もが健やかに自分らしく暮らせるまちづくりを進めることで、「笑顔」が輝くまちを実現するために、コミュニティ、地域福祉、健康、子ども・子育て・若者、長寿・介護、障害福祉の分野を位置付けている。三つ目が、「『暮らし』支えるまち」であり、安全安

心、そして快適で住みよい「暮らし」を支えるまちを実現するために、防災、生活安心・防犯、環境、交通、道路、上下水道の分野を位置付けている。四つ目の「『魅力』あふれるまち」では、活気に満ちたまちづくりを進め、「魅力」あふれるまちを実現するために、農林水産、商工観光、都市形成、公園・緑地、情報・交流の分野を位置付けている。最後の、「『未来』への責任」では、健全で持続可能な市政運営を進め、「未来」への責任を果たすために行財政マネジメント分野を位置付けている

- 草津市では、総合計画において、SDGs という世界共通の物差しを持って、多様なステークホルダーとの連携の強化や目標の共有を図っていく。基本方針ごとに関連する SDGs の 17 のゴールを示し、取組をより一層進めることで、持続可能なまちの実現を目指していく。



## (2) 谷口氏による講演

### ア. SDGs について

- SDGs（持続可能な開発目標）とは、2015年に国連で採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」の中にある17のゴールである。
- 2030年までに持続可能な社会を実現して、誰一人取り残さないという理念のもとに、これを進めていくということで、17のゴールと169のターゲットが定められており、世界共通の目標となっている。
- SDGsの達成の年度が2030年ということになっており、これから（昨年から）の10年は行動に向けた期間となっている。
- 構造として、17のゴールというものがあり、その下にもう少し具体的な169のターゲットというものが設定されている。そして、その進み具合を確認するために、232個の指標というものが設けられている。例えば、ゴール1の「貧困をなくそう」に対しては、ターゲットが幾つか挙げられており、そのうちのターゲット‘1.1’では、2030

年までに1日1.9ドル未満で生活している人、極度の貧困を全ての場所で終わらせる、ということが掲げられている。そして対応する指標としては、その貧困ラインを下回って生活している人口の割合というものをみていこうということが定められている。

- SDGs の構造の図式として、ウエディングケーキモデルというものがある。SDGs においては、環境、社会、経済、これら3つが調和しながら、持続可能な発展の形に持っていかなければいけないということを示している。一番下に土台として環境があり、その上に人が幸せに暮らせる社会というものがあり、その社会がうまく回るために経済がある、というように順番も重要である。
- また、各ゴール間の関係性というものも重要である。例えば、エネルギーという観点では、昭和30年代、40年代の高度経済成長期と言われる中では、成長していくためにエネルギーが必要で、火力や原子力が需要を支えていた。しかし、近年になり、温暖化や核の廃棄物の問題などもあり、太陽光や風力といったクリーンエネルギーの需要が出てきた。しかし、風力発電も設備を設置することによって生態系の破壊というリスクがある。また、太陽光パネルの廃棄物処理の問題も将来的には発生すると思われる。エネルギーの問題だけでも、非常に多くのゴールが関わっている（ゴールの7、8、9、12、13、15）。
- また、SDGs の取組の中で、一つのターゲットについても、色々な関係者がおり、パートナーシップが重要となっている。例えば、ターゲット‘12.3’では、小売・消費レベルにおける世界全体の一人当たりの食料廃棄の半減や生産・サプライチェーンにおける食品ロスを減少させる、という内容になっている。このターゲットを達成するには、畑で採れた規格外品野菜、工場における加工残渣、店舗での賞味期限切れの商品、家庭での食べ残しなどを減少させなければならず、色々な人が色々な場面、場所で取り組んでいくことが大切になる。
- SDGs ウォッシュ（偽装 SDGs）という観点も重要になる。エネルギーの分野では、バイオマス発電は、再生可能エネルギーとして注目されている。しかし、そのためには、燃料としてパーム油やヤシ殻が使われることもあるが、熱帯雨林の伐採や長距離輸送によるCO2排出、強制労働・児童労働、生物多様性の損失などという問題もある。このように、実体が伴っていないにもかかわらず、そのように見せかけているという問題もある。
- なお、滋賀県では、びわこ版SDGsとも言える、マザーレイクゴールズ (MLGs) という独自の13のゴールをつくっている。この春に素案が公開され、7月1日「びわ湖の日」に正式版が発行される予定になっている。

#### イ. 滋賀県立大学のSDGsへの取組について

- 滋賀県立大学は1995年に開学し、基本理念は「地域に根ざし、地域に学び、地域に貢献する」というものになっている。地域に入り込んで、そこから学び、そこから得

られた知恵をもとに知識をまた地域に還元していく、ということが大学の使命ということになる。

- 2018年に「滋賀県立大学 SDGs 宣言」というものを出した。滋賀県立大学は、環境、社会、経済にも対応した SDGs との親和性の高いユニークな学部編成となっており、SDGs に関わっていけるポテンシャルを持っているように思う。
- 滋賀県立大学では、SDGs 達成に向けた大学、学生、地域の三者による「共育共創」のプラットフォームを掲げている。
- まず、大学と地域の間には「地域課題研究」というものがあり、地域からの課題を取り上げ、それに関して、課題解決に向けた研究を行うということで、自治体と一緒に研究することもある。
- 次に、学生と地域の間には「近江楽座」という取組がある。これは、学生がグループをつくり自主的に地域で行いたい活動をしたということを大学に申請し、採択されると、色々なサポートが得られるというプログラムであり、17年間実施している。
- 最後に、学生と大学の間には「地域教育プログラム」というものがあり、ワークショップなどアクティブラーニングのカリキュラムを実施し、地域と触れ合いながら学びを深めていく機会をつくっている。
- 大学、学生、地域が連携して行っている取組としては、「キャンパス SDGs びわ湖大会」というものを毎年開催している。昨年の活動報告では、草津市の渋川小学校の児童の皆さんが、ひまわりのオイルを取り、米ぬかとまぜて石鹸を作るという取組も実践したことについて、発表を行った。この取組には県大の近江楽座のグループも協力させてもらった。
- また、昨年は「県大フードロス削減アクション!」という取組も実施した。困窮している状況にあった学生の食糧支援をしようということで始めたが、近隣の農業法人や教職員、卒業生含めて色々な方に寄付をいただいたりする中で、地域の人たちとも関係ができてきた。そして、規格外の野菜を学生に配布してフードロスを減らそうという取組につながっていった。
- 滋賀県立大学は SDGs の地域化拠点になろうという目標を持っている。地域化には二つの方向があり、一つは世界共通の目標を噛み砕いて、地域に根付かせる上から下への流れである。もう一つは、既に滋賀県に根付いている色々な暮らしの知恵や実践を SDGs の方に入れ込む下から上の流れである。これら双方向の地域化ができる大学を目指そうということで色々な取組を行っている。



ウ. 公民連携のまちづくりについて

- 個人で米原市において10年弱公民連携のまちづくりに携わっている。
- 今年、6月17日から19日まで米原市役所のコンベンションホールにおいて、「つくる未来展」というイベントを行う予定である。これは、米原市の未来をみんなで考えたり、未来に向かっての活動を紹介し合ったりするような内容である。
- 未来は勝手に作られるものではなくて、自分の手で作るものであり、欲しい未来は自分たちで作ろう、未来のまちの景色も自分たちでつくろう、というように、何かを誰かにお願いするのではなくて、自分たちのまちを自分たちでつくろう、という思いを持っている。
- 2年前にUDCBKのアーバンデザインスクールで取り上げられた「小さな空間から都市をプランニングする」などにもあるが、ただ待っているのではなくて、自分からやれることをやっていこう、というような積み重ねが、持続可能なまちづくりに今後必要になってくると思う。
- 例えば、米原市の総合計画をつくる段階で、「みんなで作る総合計画」というかたちで、市民と職員が半々ぐらいで混ざり合ってワークショップを開催した。
- また、米原市において様々な協働事業を行っている人達が集まって、それぞれの事業を紹介し合う取組をも実施した。これが発展して、「つくる未来展」につながっていった。
- 他にも、「みんなが欲しい公園を考えよう」という趣旨で、実際に屋外の広場でワークショップを実践した。それぞれがやってみたいことを行いながら、どんな公園をつくったらよいかを考えていった。この中で、ただ単に禁止事項をつくるだけでなく、利用者に任せて折り合いをつけてコミュニケーションしていくことの大事さや、市民と行政がちゃんと繋がってお互いに気持ちの分かる合うことの大切さなどの気付



きが得られた。

#### エ. SDGs への取組のアイデア

- 男女共同参画への取組については、男女共同参画のための施設や女性活躍推進に関する法律はあるが、法律で縛られているからこうやらなければならないではなく、こういったことが当たり前になるような教育や女性が働きがいを持って経済的な部分でも力をつけていくようにしていくことが必要なのではないかと考える（ゴールの 5、11、17 に加えて 4 や 8 が必要）。
- SDGs の課題の関係性を意識するという点について、環境・社会・経済という三つの側面を同時に向上させないといけない（ゴールの 13、11、8 を同時に達成）。また、組織の壁という問題もある。例えば、先述のフードロス削減という課題でも、大学内で食糧配布を主体としてやるのは学生支援なのか地域連携なのか、どこの部署で対応するのかという議論があった。最終的には、地域連携で始めてみると学生支援や留学生への対応をする部署なども協力してくれて、非常によい形でできた。まずは、やってみようということが大事なのだと考える。
- 食品ロスについては、ゴール 12（「つくる責任 つかう責任」）で掲げられているが、その裏には飢餓（ゴール 2）や貧困（ゴール 1）という問題も隠れている。課題の繋がりが意識しながら、どういう取組をしていく必要があるかを考えていかなければいけない。飢餓や貧困といった問題に対して、例えば、食品ロスを皆で失くそうという切り口で取り組むことも一つの方法と思われる。
- 自然環境の保全という点に関して、例えば、山があつて自然があるというだけではなく、その山の森林がどれほど健全に保全されているか、というところまで見ていかないといけない。また、里山の事例にもあるように自然もまちの一部であるという視点が必要となる。自然は、ゴール 13（気候変動）や 15（緑の豊かさ）の他にも、11「住み続けられるまちづくりを」や 12「つくる責任 つかう責任」といった自分たちのライフスタイルに密着した課題であるというように意識したほうがよい。
- 生涯学習について、これからの学びは、従来のインプットだけでなく、アウトプットを意識することも重要である。何かをつくり出したり、気付いたりということが大切になってくると思われる。生きがいや働きがいと繋がる共創という観点がこれからの講座などには必要になってくる。そして、共創はまさに、アーバンデザインセンターが担うべきところである。
- 総合学習・ESD 教育では、子どもに教えるのと同時に、子どもから学ぶという意識が必要かもしれない。例えば、2020 年度の「キャンパス SDGs びわ湖大会」の大会テーマは『子ども・若者』と『大人』がともに歩む SDGs への 10 年』ということであったが、既に子どもたちの様々な活動から大人が学ぶところが多いのではないかとと思うようなことがあり、先述の渋川小学校の取組などはとても感心するものであった。



- SDGsを知る、ということでは、関連図書を図書館で展示するというようなことがあると思うが、その時に、ただの展示ではなく、本に書かれている内容を帯にして付けるというワークショップを行う方法もある。そこで得られた気付きをフィードバックし、伝えていくことなる。
- 昨年度のアーバンデザインセミナーでも取り上げられたが、現在の立場を離れて将来世代になって物事を考える「フューチャー・デザイン」も、市民が主体的にまちのことを考える手法として自治体などで実践されている。現状のしがらみからではなく、俯瞰的に考えて、いろいろなアイデアを出し合うことで、住み続けられるまち（ゴール 11）やパートナーシップでの目標の達成（ゴール 17）にもつながっていく。
- これからが SDGs の行動の 10 年となる。今回のセミナーをきっかけに、皆で、これからどんな社会にするのか、どんな未来の草津にするのか、ということを考えていくことが大切になる。

### (3) 谷口氏と企画調整課との意見交換

企画調整課: 最後のパートでは、こういった取組ができるのではないかといった御提案や他市の事例、また食品ロスの話にもあったような組織の壁というものも御紹介いただきながら、こういった進め方もある、というかたちで御提案をいただくなど、考えさせていただく機会となった。

谷口氏: 草津市のホームページを拝見すると、総合計画は、市民会議などを何回も重ねて、丁寧に作られているという印象を受ける。一つ質問したいのは、計画などは 10 年が多いが、今回の計画の期間が 12 年となっているのはどうしてか。

企画調整課: 基本的に自治体の市町村の首長については任期が 4 年となっており、その任期に合わせて、1 期、2 期、3 期というかたちで 4 年の基本計画を立て、計 12 年間となる。

谷口氏: 確かにその方が、方針などが変わらないということでもよいかもしれない。あと、もう一つ、市民会議にはどのような人が参加したのか。人選での工夫はあったか。

企画調整課: 総合計画策定市民会議においては、子育てやコミュニティ等の関係団体から参画いただいたほか、公募で市民の方にも参加いただいた。

谷口氏: 審議会と市民会議の両方を行われて広く意見を集められたということと認識した。ちなみに米原市の総合計画の事例では、あえて分野を特定せずに、その場に來たい市民と行政職員が一緒になってフランクな話し合いをした。

## 5. 質疑応答

(1) Q: 総合計画は市民のどれくらいの人知っているのか。

A: (企画調整課) 現時点では、統計上でどれほどのパーセンテージかということは把握していない。ただ、総合計画の策定については、市民会議や審議会、パブリック

コメントのようなかたちで市民の方の御意見もいただいている。また、このようにアーバンデザインセミナーというかたちで、総合計画の説明ができたということも有り難いと思う。今後も、「広報くさつ」などを通して広報させていただくことが重要となってくると考える。

(2) Q: SDGs の目的は何か。また、滋賀県立大学の取組は大変素晴らしいと思うが、SDGs という単語が入ると、少しぼやけてしまうようにも感じる。

A: (谷口氏) SDGs は持続可能なかたちで、社会に誰一人取り残さずに皆が社会の中で生きていけるようにしよう、ということが目的になる。その大きな目的をそのまま一人で背負い込むのではなく、それを自分なりに噛み砕いて、やっていくということが大事だと思う。また、周りの人と繋がるということもすごく大切になる。また、大学については、滋賀県立大学は 1995 年に開学した時から、地域で SDGs 的なことをやっていたと感じる。確かに、SDGs という言葉を使うことによって何か地域から離れてしまうような印象もないことはないかなと思う。そういうこともあり、「SDGs の地域化拠点」ということを掲げている。

(3) Q: 大学において、教員、職員、学生、地域という 4 つのアクターが示されたが、職員の役割はどういったものになるか。

A: (谷口氏) 職員はそれぞれの業務の中で、自分の仕事がどのように SDGs に関わっているかということを考えて職員同士でお互いに気付き合うことが大切になる。

(4) Q: 取り組まないといけない課題が多数ある中で、優先順位や長期的な改善計画に関して、どのような考えを持っているのか。

A: (谷口氏) まずは、考えられること、思いついたことをやってみる。あるいは面白そうなことをやってみる。そういったことから始めると色々な人と繋がってくる。全部を自分で解決するというのではなく、周りの人にも助けをもらいながら、また自分ができるところは人を助けながらやっていくことを心掛けている。

## 6. まとめ

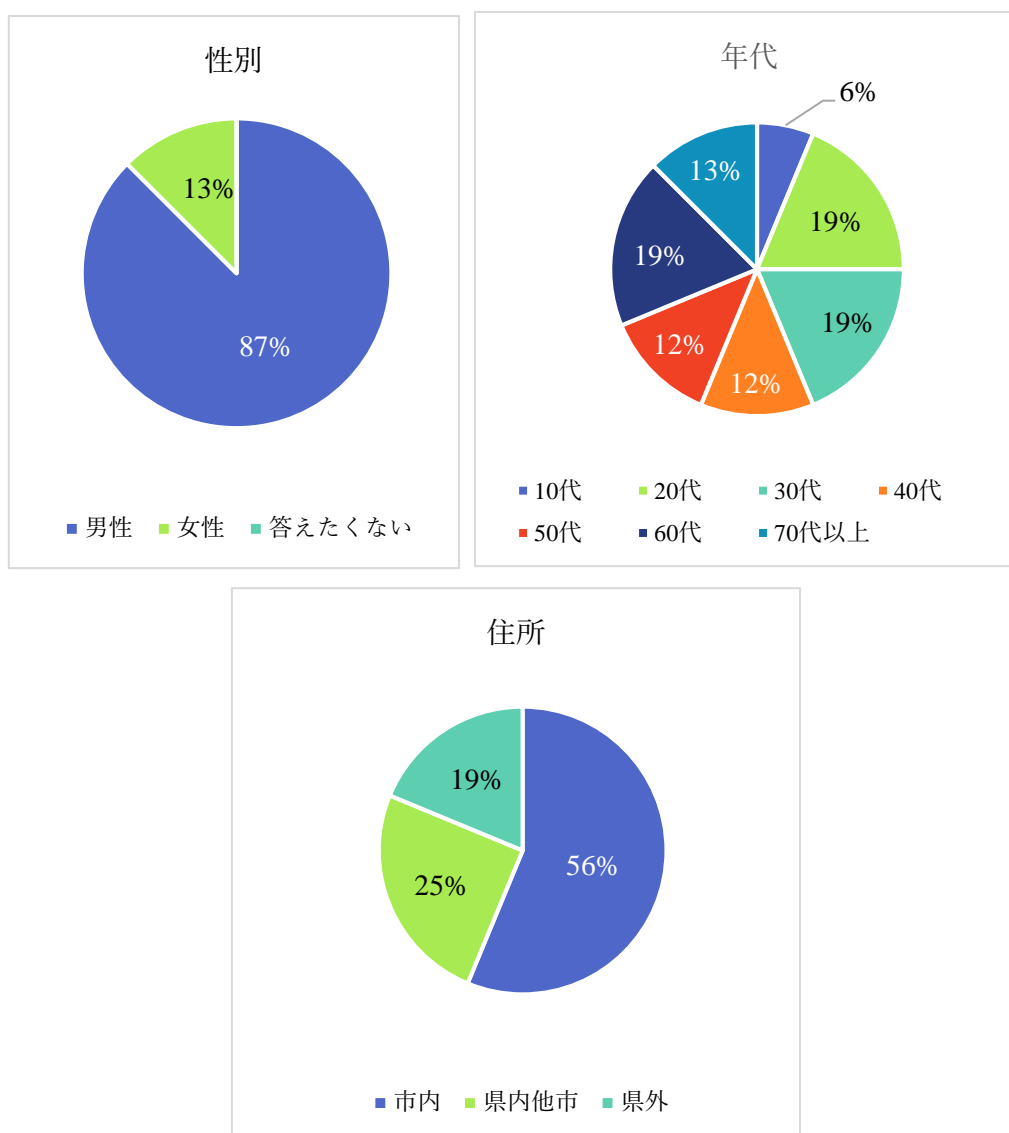
- まちの未来を世界共通の物差しである SDGs と関連させて考えていくことは大切であり、自分たちの行動がどのようにまちづくりに繋がっているのかを理解するきっかけとなる。
- SDGs という大きな目標を日々の行動の中に落とし込むことで、総合計画も自分事として考え、実践していくことが可能になってくる。
- UDCBK では、総合計画において「産学公民連携によるまちづくりの展開」を掲げているが、「住み続けられるまちづくりを」と「パートナーシップで目標を達成しよう」

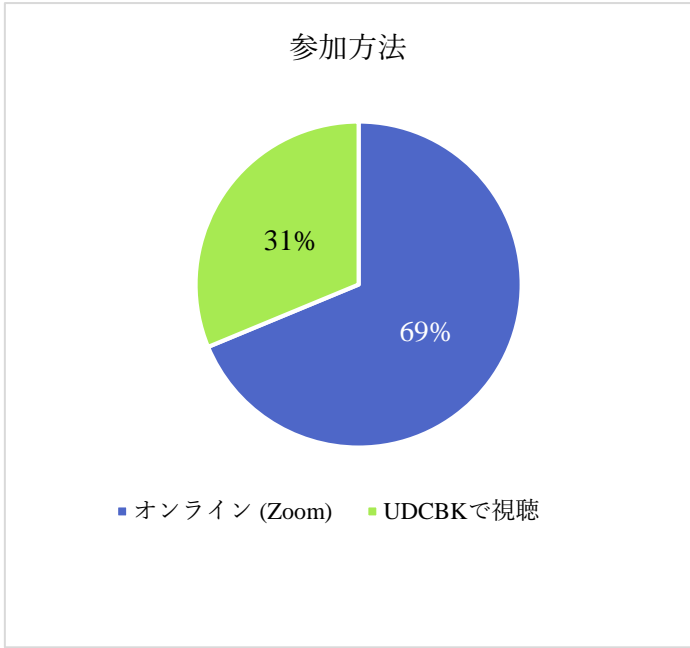
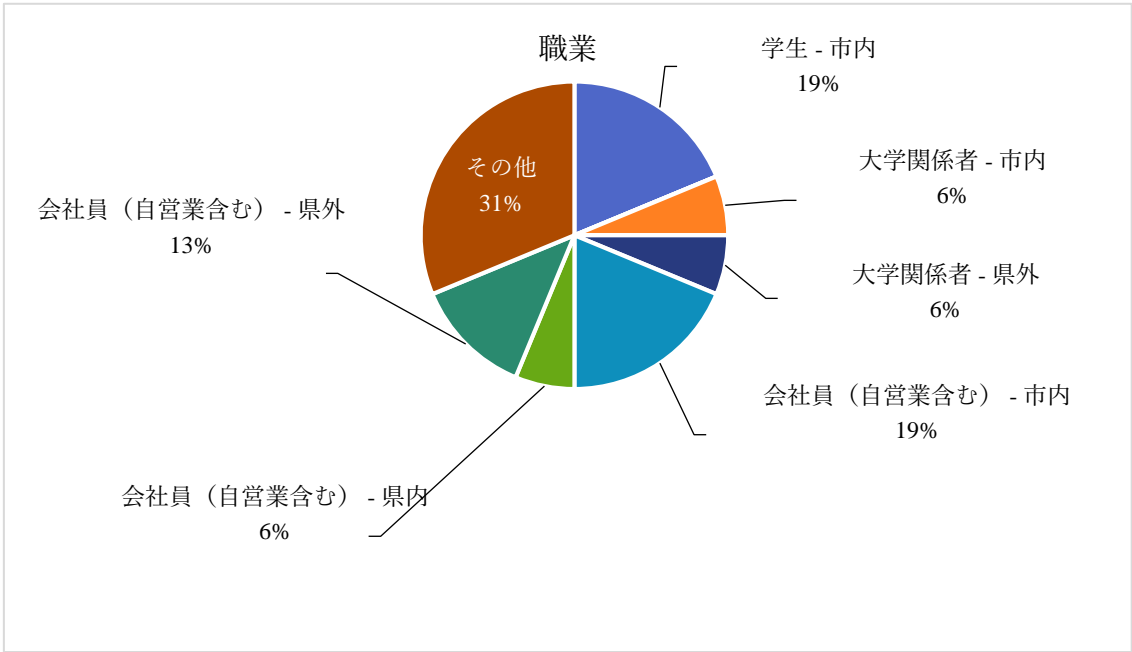
という二つのゴールを見据えながら、それぞれの事業を具体的な行動に繋げていくことが重要になる。

## 7. アンケートまとめ

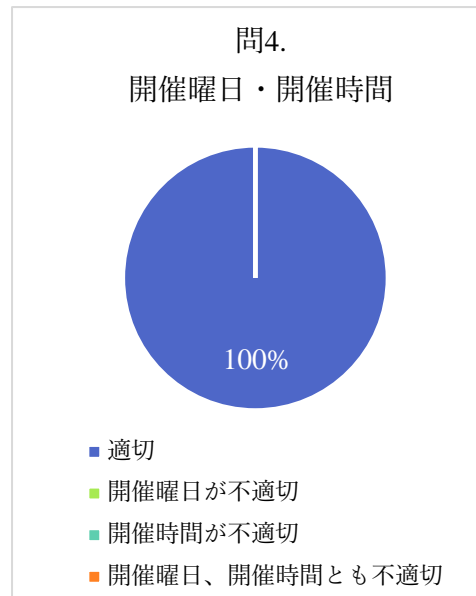
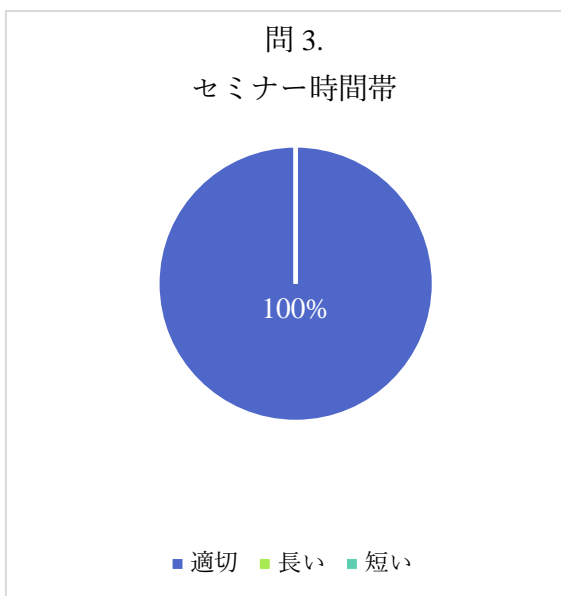
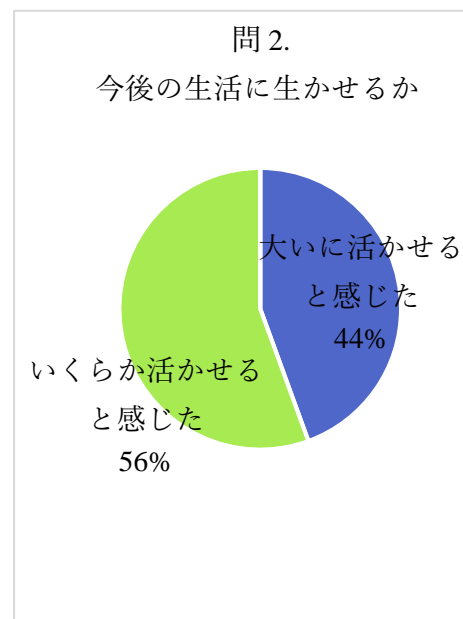
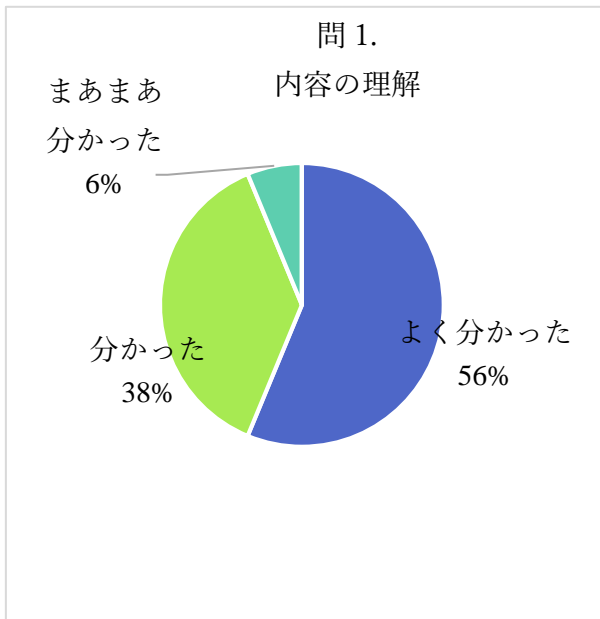
### (1) 参加者属性

参加者 32 名のうち、アンケートに回答いただいた方は 16 名、回答率は 50%だった。





(2) 内容について



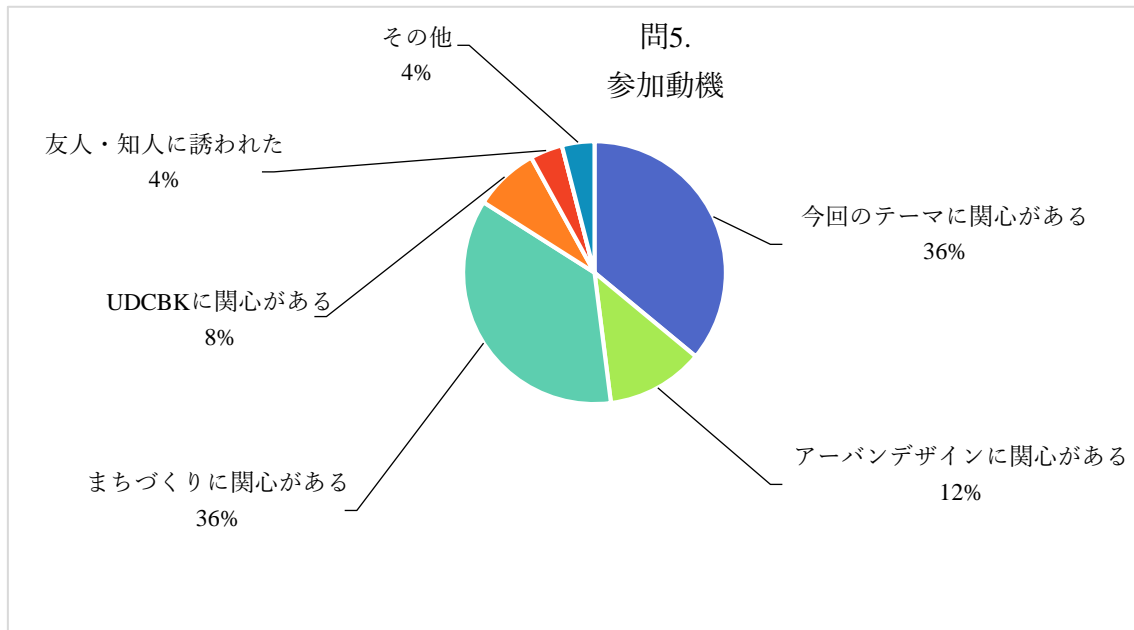
[自由記入欄回答]

問3. 時間はどうでしたか。

回答なし

問4. 開催曜日、開催時間は適切でしたか。

回答なし



[自由記入欄回答]

問6. それぞれに関心のあるテーマについて御自由に記載ください。

- 1、魅力あるまちづくり
- 2、持続可能なまちづくり
- 3、関係人口の増加を図るまちづくり
- 4、自然エネルギーを活用したまちづくり
- 5、移住定住を増やすまちづくり
- 6、公共交通と自動運転を生かし、過疎化に対応した交通体制の構築
- 7、IT化を推進し、オンライン診察ができるような体制を作る。  
そのことによって、過疎地域の医療体制を充実させる。(70代以上男性)
- ソーシャルビジネス、スマートシティ (30代男性)
- 持続可能なまちづくりに関心があります。(40代男性)
- 気候変動 環境計画、再生可能エネルギーとまちづくり、グリーンスローモビリティとまちづくり (60代男性)
- 第6次草津市総合計画実現に向けての、「まちづくりの基本目標」の項目ごとのテーマに関すること (60代女性)
- まち全体のDX化について (30代女性)
- 交通まちづくり。草津の地域の公共交通を使いやすく。(40代男性)
- 防災・環境・公園など (50代男性)

## 【自由記入欄回答】

問7. 今回、印象に残ったこととその理由をお聞かせください。

- 草津市総合計画では、市民の考えをきちんと取り入れて計画を策定していて素晴らしいと思いました。今後、どのように目標を実現していくのかを楽しみにしています。谷口さんの SDGs では滋賀県立大学での取組みや理念は聞いていて素晴らしいなと思いました。野菜の取組みはコロナがきっかけですが、そこで終わらずにビジネスにも通じる仕組みをきちんと考え、継続的な取組みになることを期待しています。  
(30代男性)
- ひとつの公園の広場の中で、別々の遊びをしている子どもたちが入りまぎっている話: 遊び方を規制・誘導しないような公園の構想のイメージが湧いた (20代男性)
- ・将来に描くまちの姿として目指す目標について、今回、市民・地域社会と共有されたことに意味があると感じた。  
・谷口さんの講演では、SDGs の 7 エネルギーや 12 消費について、多面的に見ることの意味を教えていただいた。  
・また、米原市を MIRAI と読んで、つくる未来展というおもしろい取組みがあることをはじめて知った。(30代男性)
- 滋賀県立大学での取組みがよく分りました。(40代男性)
- ・「草津市の総合計画」  
分類・趣旨の違う集合体の市民や会議体・集団からの調査をされているのが興味深い。市民の意識や参加の度合いが弱い場合 市民調査は大事だと思います。  
・「太陽光パネルの再生利用・廃棄 設置場所」について  
今まで あまり議論も検討もなされないことが多かったです。本セミナーで環境->社会->経済の流れの中で取り上げていただきうれしいです。都市計画・国土利用計画・景観計画・防災計画などの枠組みだけでは どんどん彼方此方にパネルが増えることを見直す時期が来たと思います。  
・「県立大学の SDGs の取組み」  
幅広く実践段階でのご紹介がわかりやすかった。(60代男性)
- 今回の SDGs の話は、大変わかりやすい資料もあり、良く理解できた。講師の方が、専門的立場からも、また、1人の市民としても地域の中で実践しておられる様々な活動は、今後の草津市の活動にも参考になるものだと感じた。その中で、フードロスの削減活動が特に印象に残ったのは、草津市で、実際、取り組むことを考えた時、比較的早く実行できるもののように感じたから。(60代女性)
- 自分以外の大学でも SDGs に関する取組みがされていることが知れた。立命でも SDGs に関するイベントがあり、その企画などをしているので参考になった。(10代男性)



- 滋賀県立大学が非常に地域と連携していること。(40代男性)
- SDGsウォッシュに注意して広く考えること。学生・大学・地域「共育共創」。インプット講座からアウトプット講座。アウトプットすることで街づくりを考える。子供たちから大人が学ぶ。「若者は明日のリーダーではない。今日のリーダーだ。」  
(50代男性)
- SDGsの取り組み方、特に地域でのまちづくりの進め方。17の項目の関連、正の貢献、負の貢献、の図。(60代男性)